

令和元年6月16日現在

機関番号：32661

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01762

研究課題名(和文) 家族システムケアアプローチを用いた周産期家族支援プログラムの開発研究

研究課題名(英文) Development study of perinatal family support program on the family system care approach

研究代表者

臼井 雅美 (USUI, Masami)

東邦大学・健康科学部・教授

研究者番号：50349776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：家族システムケアアプローチによる周産期家族支援プログラムを開発・検討することを目的とし、A・B助産院に通院している初めて親になる夫婦17組に対して、妊娠期および産褥期に家族支援プログラムを実施した。その結果、周産期家族支援プログラムは家族機能を高めることに働くことや、抑うつ状態であると家族機能は強化されない傾向は示されたが、本プログラム受講後は主観的幸福感を高めたり、プログラム受講後の自己効力感が高いと家族機能が強化されたりする結果は示されなかった。一方、家族やその関係性が可視化されることでの効果が示され、本プログラムは家族システムの移行がスムーズとなり、家族機能が強化されることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族システムケアアプローチを用いての家族支援は、ジェノグラムやエコマップを使用し夫婦でどのような役割関係やサポートを得るのかを可視化することによって家族像を具体化するとともに、円環パターン図を用いて妊娠・出産・育児に伴う夫婦の関係性を相互に認識し、不安や困難への対処を見いだすことができる。これまで看護アセスメントとして北米を中心に広まった視点を、ケアの対象者、特にセルフケア能力の高い周産期の夫婦に応用し家族機能に対する効果が得られている。現代社会における母子の孤立や親のメンタルヘルス、強いては児童虐待などの社会問題を解決する上でも有用と考えられる。

研究成果の概要(英文)：The principal aim of the present study was to develop and examine a perinatal family support program on the family system care approach. A family support program was implemented during pregnancy and puerperium for 17 couples visiting A and B maternity hospitals who were to be parents for the first time. The results indicate that the perinatal family support program tends to work to enhance family function and that family function is not strengthened when the subject is in a depressive state. However, after participation in this program, there was no result of enhanced sense of subjective well-being or of strengthened family functions if self-efficacy after taking the program was high. However, there was an effect due to the family and its relationship being visualized. These findings suggest that this program may facilitate the transition of the family system and strengthen family functions.

研究分野：子ども学

キーワード：家族システム 周産期 家族支援 初産婦夫婦 夫婦関係 親子関係 家族機能

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 妊娠・出産は、新しい家族を迎える重要なライフイベントであるが、母親を中心とした家族にとって多少なりともストレスを抱え、家族の発達危機となり得る。特に妊娠期は親になる「移行期」の始まりであるが、この時期の問題として子どもを持つことによる夫婦関係の悪化や、夫婦の親密さの低下が指摘されている。そのため、この移行期は夫婦が育児をする上での悩みや心配事を共に考え、相談し合える関係性が不可欠であり、心理的な交流を通して夫婦の絆を深め育てていくことが重要である。また、母親にとって出産後1か月間は、子育てに対して自信の無さや精神的な不調、子どもの扱いにくさを感じ、さらに、夫との関係や家族との関係に対して否定的に捉えている。このように、核家族化や都市化、少子化が進み、親役割の獲得が難しい今日、妊娠・出産を含む周産期を家族発達の機会として、母子だけでなく、家族を中心とした支援が求められている。

(2) 日本における育児支援施策の多くは、母親への支援を中心に展開されているが、親としての資質や準備性を問うならば、親になるまでの生涯発達も視野に入れた妊娠期からの支援が必要となる。しかし、妊娠期の支援プログラムは、健康管理や出産準備教育に重点をおいたものが多く、新しい家族を迎えるにあたって、家族の関係性に着目し家族システムを構築していくという視点から看護援助を行うことや援助の結果を調査した研究は、ほとんどみあたらない。そこで今回、夫婦を中心とした家族システムに働きかける「家族システムケアアプローチ」に着目し、妊娠期から産褥1か月における「家族支援プログラム」を開発したいと考えた。

(3) 家族システム論に基づいたカルガリー式家族アセスメント/介入モデル(CFAM/CFIM)は家族の構造面、発達面、機能面の3側面から、ジェノグラム(家系図)やエコマップ(環境図)を書きながら家族の姿を浮かび上げさせ、家族のアセスメントに基づき、感情・認知・行動の3領域の中で、家族に適する領域から支援していくものである。その際、アセスメントの表出的機能の一つである円環的コミュニケーションの基本パターンを用い、認知・感情・行動の3つを基本的な要素として苦悩の根源となっている関係性の状況や、パターンのどの部分を変化させると事態が好転・変化するのかを、家族と看護師が共に検討でき得るものである。これらCFAM/CFIMを参考にした家族システムアプローチを用いて、周産期における初めて親になる夫婦を対象に、ジェノグラム・エコマップ、円環パターン図を使用した周産期家族支援プログラムを開発し、検討していくこととした。

### 2. 研究の目的

(1) 周産期の初めて親になる夫婦を対象に、家族システムケアアプローチを用いて、家族システムや夫婦の関係性を可視化できるジェノグラム・エコマップおよび妊娠・出産・育児に伴う夫婦の関係性を相互に認識すると共に、不安や困難への対処を見いだす円環パターン図を使用した周産期家族支援プログラムを開発・実施し、その評価を得る。

(2) 本研究における周産期とは、妊娠22週から後期新生児期を含む児の出生後1か月までとし、家族システムケアアプローチとは家族をひとつのシステムとして考え、家族成員に生じた問題解決のための家族支援で、カルガリー式家族看護アセスメント/介入モデルにあるジェノグラム・エコマップ、円環パターン図を中心に用いた支援方法とした。

### 3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：量的研究と質的研究を用いた方法論的トライアングレーション

(2) 対象者：A・B助産院において妊婦健診または両親学級や母親学級などの集団指導に参加していた初めて親になる夫婦17組(以下、介入群)と対照群として同条件の夫婦23組である。

(3) データ収集期間：平成27年5月～平成29年2月

(4) 介入方法：介入群に家族システムケアアプローチによる周産期家族支援プログラムとして、妊娠期にジェノグラム・エコマップ、円環パターン図の入ったMy Family Diaryを媒体に『プレママ・プレパパのためのファミリークラス(以下、FC)』を実施した。また、産褥1か月健診時に、5年後のジェノグラム・エコマップを記載しながら将来的な家族像を構築すると共に、家族に対する困り事・不安などについて円環パターン図を記載しながら介入する個別クラスを実施した。なお、対照群については、調査終了時に個別介入を行った。

(5) データ収集方法

介入群には、初回のFC開催前(介入前)およびFC直後(介入直後)、産後2か月(介入後)に自記式質問紙調査を行い介入前後の比較検討を行った。また、対照群には介入前と介入後に同様の質問紙調査を行い2群で比較検討した。使用尺度は、(a)家族機能測定尺度日本語版(FFS)、(b)主観的幸福感(SWBS)、(c)自己効力感尺度(GSES)、(d)合衆国国立精神保健研究所疫学的抑うつ尺度(CES-D)とした。なお、介入群における介入直後の調査は上記(a)と(b)を実施した。

介入群に対して産後2か月(介入後)に、ジェノグラム・エコマップによる家族構築のイメージおよび円環パターン図による夫婦・親子の関係性の変化についてインタビューガイドを用

いた 1 時間以内の半構造化面接を行った。

(6)分析方法：介入前後比較においては、夫婦別に Friedman 検定と Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。一方、介入群と対照群の比較分析では経時比較については Mann-Whitney の U 検定を、介入群と対照群の比較では 2 元配置分散分析を統計ソフト SPSS Statistics 23.0 を使用し分析した。また、質的データについては質的研究ソフト Nvivo11 Pro を用いて自動コーディング機能を活用しながらカテゴリー化を行った。

#### 4 . 研究成果

(1)研究の協力が得られた介入群 17 組、および対照群 23 組のうち、健康上の理由や家庭の事情により介入群 1 組、対照群 4 組が除外され、介入群 16 組、対照群 19 組を分析対象とした。

(2)対象者の平均年齢は妻が介入群 29.1 歳 (SD=3.67)、対照群 31 歳 (SD=3.37)、夫が介入群 34.1 歳 (SD=5.67)、対照群 33.2 歳 (SD=3.71) で、家族形態は介入群で核家族が 14 組、拡大家族が 2 組、対照群は全て核家族であった。その他、結婚年数、教育年数、就労形態、経済状態においても両群に有意な差はみられなかった。

(3)周産期家族支援プログラムと家族機能 (FFS) との関連では、FFS 下位尺度のうち妻の「役割と責任」と夫の「役割と責任」「家族規範」「経済的資源」で産後 2 か月が有意に高値を示した。また、2 元配置分散分析による介入群と対照群との比較では、妻の「役割と責任」「経済的資源」に交互作用を認め、介入群の妻の方が有意に高値を示していたことから、本プログラムは家族機能を高めることが検証された。

(4)周産期家族支援プログラムと主観的幸福感 (SWBS) との関連では、介入群の 3 時点での前後比較および対照群との比較から SWBS 合計得点に有意な差はみられなかったが、下位尺度「達成感」は介入群夫で産後 2 か月が有意に高値を示したことから、本プログラムは夫の達成感に影響を及ぼしていた。

(5)周産期家族支援プログラム後の自己効力感 (GSES) と家族機能との関連では、GSES の高低群別に妊娠期と産後 2 か月の FFS の変化を 2 元配置分散分析で検討した結果、GSES の高い群は有意な交互作用がみられなかった。

(6)周産期家族支援プログラム後の抑うつ状態 (CES-D) と家族機能との関連では、夫に抑うつ傾向のある介入群で FFS の平均値が有意に負に転じていたことから、抑うつ状態にある場合、家族機能が強化されないことが検証された。

(7)周産期家族支援プログラムの家族やその関係性の可視化が与える影響として、家族構築のイメージの変化について面接調査の内容を質的に分析した結果、【家族の可視化による家族構築の再認識】【将来の家族像の認識】【家族意識の変化】【家族支援者の明確化】の 4 つのカテゴリーが、夫婦・親子の関係性の変化として【夫婦関係に対する認識】【親子関係に対する認識】【家族や社会に対する苦悩の認識】の 3 つのカテゴリーが抽出され、プログラムは家族やその関係性を可視化することにより、出産後の家族や将来的な家族像に対してイメージ化でき、家族の関係性やサポートについて認識できることが検証された。

以上より、家族システムケアアプローチを用いた周産期家族支援プログラムは、従来のマタニティクラス等とは異なった内容であり、介入群の評価からも妊娠期に家族を考える意義は大きいと考える。今後は時期や回数、妊娠時期に合わせた内容を取り入れ、家族システムの移行がスムーズになるような支援を検討していきたい。

#### 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①臼井雅美、島袋香子、テキストマイニングからみえる「親」研究の特徴 - 医学中央雑誌医学用語ソーラスを用いた過去 10 年間の分析 -、北里看護学誌、査読有、vol19、No.1、2017、pp. 22-31 .

〔学会発表〕(計 5 件)

①臼井雅美、島袋香子、園部真美、初めて親になる夫婦の妊娠期における家族機能 - 抑うつ状態と自己効力感との関連 -、第 59 回日本母性衛生学会総会・学術集会、2018 .

臼井雅美、島袋香子、初めて親になる夫婦に対する周産期家族支援プログラムの開発とその評価 - 家族機能と関連要因に着目して -、日本家族看護学会第 25 回学術集会、2018 .

③臼井雅美、島袋香子、妊娠期からの家族システムケアアプローチを用いた家族支援 - 初めて親になる夫婦を対象にしたプログラムの開発 -、日本家族看護学会第 25 回学術集会、2018 .

臼井雅美、田久保由美子、テキストマイニングを用いた日本における『出産前教育』研究の動向と構造化分析、乳幼児保健学会第11回学術集会、2017。

Masami Usui, Kyoko Shimabukuro, Trend and Structured on “Parent” in the Past Decade: Characteristic of Medical Thesaurus Terms in the Past 10 years by the Text Mining Method, 13th International Family Nursing Conference, 2017。

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：田久保 由美子

ローマ字氏名：(TAKUBO, yumiko)

所属研究機関名：東京医療保健大学

部局名：千葉看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20385470

研究分担者氏名：島袋 香子

ローマ字氏名：(SHIMABUKURO, kyoko)

所属研究機関名：北里大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：70206184

研究分担者氏名：園部 真美

ローマ字氏名：(SONOBE, mami)

所属研究機関名：首都大学東京

部局名：人間健康科学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：70347821

研究分担者氏名：金子 あけみ

ローマ字氏名：(KANEKO, akemi)

所属研究機関名：東京医療保健大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：80588939

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。